

春燈

5 月号

May 2011



主宰の句

安立公彦

己が喜寿に戸惑ふなかれ春の鳥

うすらひの薄き挨を日に挿頭す

ひと去りて天日冥し春の山

浅間嶺に雲影はやし雪間草

花文字もて描くイニシアル啄木忌



久保田万太郎の句

鳴く蟲のたゞしく置ける間なりけり

『冬三日月』昭和二十七年

「このところ四五日、上京せず、鎌倉にこもる」の前書があり、七句中最後の一句。例の鎌倉は材木町、モリソン屋敷での様子がうかがえる。春燈創刊の年。三田きみとの結婚はこの年末。

成瀬櫻桃子はその著「久保田万太郎の俳句」にこの句を記したあと、「余計な説明語を削り取ると言葉の力が倍増し、縫いとりの裏側を想像させる」と述べている。

山内四郎

久保田万太郎の句

花にまだ間のある雨に濡れにけり

『冬三日月』昭和二十七年

「菊池寛・逝く。告別式にて」と前書がある。まるで長い沈黙のあと、舞台の幕が静かに下りるように、降って来た雨。一人雨に濡れて立つ万太郎の姿が見えるようだ。

「花にまだ間のある」の措辞に、菊池寛を惜しむ気持ちが見えつせつと伝わって来る。万太郎はしばしば演出した戯曲の一場面を句に仕立てた。この句も、人を送る自身の姿と気持を客観的にとらえた視点が感じられる。

岩永はるみ

燈下集



○ 滝沢幸助

眼をつむればそこが天国兼氷室
春の雪下手は上手の手本とぞ
おごそかや飯豊嶺の雪まだ消えず
寒牡丹いのちいたはるとは敦の句
この国に明日ありやとて雪に老ゆ

○ 中村嵐楓子

漂着の鯨葬るべく集ふ
寒梅や黒極まりし武家屋敷
早春やうごめくものときらめくもの
歌舞伎座の見えぬ不思議や春シヨール
頬杖をして存分の春うれひ

○ 鷹崎由未子

○ 末吉治子

東風吹くや北側棟に入院す
春の日や大鵬関の声漏るる
春の日や横綱入院本名で
春場所無く力士の見舞無き日なり
やつと放免巷の彩は春一色

○ 鷹崎由未子

公魚の釣られしあとの水の黙
今さらと言ひつつ求む春みくじ(湯島三句)
獅子舞の神籤人形梅の昼
万太郎旧居訪ふ梅ヶ香の女坂
鳩時計春日が射して鳴きにけり

○ 萩原 すみ

櫻桃子先生の声山笑ふ

先生の文読んでゐる冬深し

百日を無言で通す大枯木

雪見酒に酒の八徳談義かな

寄書に亡き人の名や雪明り

○ 小張 昭一

弥太郎の父は弥次郎暖かし

絵馬掛けのまた一架増え梅日和

春雷や華語の飛びかふ電波街

木の芽吹く銀座マロニエ通りかな

春愁やめぐりためらふ月曆

○ 鈴木 鳳来

涅槃会の鴉は黒に徹しけり

多喜二の忌雁字搦めの毛蟹かな

下萌や鼻緒のきつき日和下駄

青き踏む秩父札所の結願寺

水温む甲羅干す亀泳ぐ亀

○ 松本 峰春

帰る鳥の一羽が先導和昭の忌

鳥帰る一羽旧知の『花喰鳥』

臘月伐折羅大将相緩ぶ（新薬師寺）

「柳湯」とその名を冠す柳に芽（城崎温泉大谿川）

ピアノ連弾啓蟄前の虫を起す

○ 中野 英伴

啓蟄や世の棘かはす術知らず

生と死の親しき往き来春の夢

世にそむき律儀に生きて蜷汁

亀鳴くやふん切りどきをふん切れず

春夕べ指環が縛る気の迷ひ

○ 木村 傘休

後先の分らぬ春の寒さかな（遠山一郎君急逝）

まなうらに灯る笑顔や春の雪

骨折の仔細に及ぶ余寒かな（鶴岡紀代さんへ）

父母ありし日を身辺りに目刺焼く

猫のあけし穴また貼りぬ春障子

当月集

安立 公彦選



○ 畑焼の烟まとへり道祖神

行きかけて見に戻りたる梅三分

梅東風や異国の文字の絵馬揺るる

菜の花の向かうのきみを呼ぶ夕べ

春愁や笑まふをみな糸切歯

○ 藤原若菜

○ 篠原幸子

打菓子ほほと崩れて春の雪

春満月ほほゑみながら上りけり

読み終へし一書の余韻涅槃西風

鳥帰る引止むる術なきままに

落椿盆に載せたる紅さかな

○ 矢口笑子

雛の間に微笑む母の遣影かな

笏失せし男雛無聊の手をさらす

花桃や恋するならば右大臣

女には女の秘密雛の酒

雛納む街の喧騒にはかなり

○ 小山繁子

むめが香を身纏ふ鎌倉古道かな

春炬燵行をはみ出す日記書く

芽吹山鳥語しきりにひもすがら

春耕や土ゆつくりと動き出す

春惜しむ人待ち顔の羅漢像

○ 都丸美陽子

渡り来し橋もどりゆく梅見かな

薄氷を音たてて踏み登校す

琴の音に耳すましゐる雛かな

まどろめる卑弥呼の墓や地虫出づ

ふらここを漕がず人待つ夕かな

春燈の句

安立 公彦選

遙かより呼ぶ声のあり鳥帰る

千葉 中嶋 昌子

保育器に眠るみどり児春の雪

古伊万里の小鉢好まし花菜漬
雛恋ふる齡重ねては重ねては
願ひ文かたく結ばれ梅開く

青き踏む遠き日の風身ほとりに

老梅の古瀬戸の鉢や香をきく

花辛夷咲き満ちてより風の日々

打合へる木々の芽固し多喜二の忌

やはらかな雲の流れや山笑ふ

兵庫 伊藤 百江

本堂に園児の集ひ山笑ふ

宝相華文御堂に映えて水温む

店先に試食の目刺煙あげ

春愁ひ抱く花束にまよひあり

海恋ひの眼抜かれし目刺かな

口ずさむ「故郷の廢家」春ふかし

きりり引く寒紅濃ゆき華甲かな

宮城 西川 春子

リハビリの顔の歪みや冴返る

球根の花の芽のぞく庭所

ひとり居の背に貼りつく余寒かな

神主はをみな今戸の土雛

禅堂の燭のさゆれや春障子

閑伽桶に薄氷母の忌を修す

外に出ませ早春の音きき給へ

宮城 宮川 英子

若き日の夢道づれに青き踏む

大仏の胎内ぬくし妻とゐて
ぬけうらに猫の戯れ合ふ春の闇

東京 小俣 剛哉

東京 齋藤 晴夫

埼玉 原田たづえ



余言

安立公彦

わが胸の残雪の嵩計られず

西谷 良樹

残雪をこのような表現で詠んだ句はめずらしい。しかし良く分る。「残雪の嵩」が「わが胸の」とみごとに溶けあっている。読後に残る一抹の愁いも、残雪ゆえあと味は清かだ。しかし作者にとつてはこの「嵩」は後悔を伴うものなのだろう。出色の心境俳句である。

魚は氷に上り恋句のよどみなし

白杵 游児

バレンタインデーいちにち夫を置去りに 小石 珠子

歳時記によると、ローマの司教聖バレンタインが殉教した日で、日本では昭和三十三年頃から流行したとある。しかしバレンタインは西暦二七〇年頃、梶棒で撲殺されている。この季節に鳥が交わり始めることから、愛の日として流行したとのことだが、そのことと撲殺された司祭の名の由来はどのように関連づけられるのか。

流行は時代とともに変わる。目下マスコミは「友チョコ」を取り上げる。親しい女性がお互いに贈り物を交換し、親交を深める日となると、当然「夫」はひとり置去りになるうといふもの。この句から感じられる滑稽味は、まさしく当世風俳諧感と言えよう。

「魚氷に上る」という季語について。日本に古くからある二十四節気をそれぞれ三分して、ほぼ五日ごとの気象、自然動物、植物等の変化を具体的に表し、日常生活上の目安にしたものが七十二候である。その七十二候の内、春は初春、仲春、晩春に分かれ、それぞれ二十四節気の立春、雨水／啓蟄、春分／清明、穀雨と細分される。そのまた一気ごとに、初候、次候、末候があり、その立春末候（二月十四〜二十八日）が「魚氷に上る」である。雨水初候の「獺魚を祭る」、啓蟄末候の「鷹化して鳩となる」も同じ暦の一候。（松井吉昭氏「七十二候と日本のしきたり」）

暦の引用が長くなった。この句、「恋句のよどみなし」がみごとだ。作者は歌仙の指導者でもある。芭蕉は歌仙について、「一步も後に帰るなし」と諭す。歌仙と俳句の違いはあ

るが、この句、正に芭蕉の謂に沿う。一席の情景が目に見えるようだ。

蔵街のうらは寺町梅日和

佐々木 新

二月の本部句会でこの句を見て、寺山修司の短歌を思い出した。へ大工町寺町米町老母買ふ町あらずやつばめよ。修司二十八歳の歌。いかにも寺山修司らしい短歌だ。

作者の句、省略がよく効いている。修司の歌とはモチーフは異なるが背景は共通する。ただし修司の歌の意外性に対し、作者の句の安定感は読後の思いを深める。それは一句の構成とともに、「梅日和」の季語に負う所も大きい。

読み終へし一書の余韻涅槃西風

篠原 幸子

こういう思いは良くわかる。本を読むということ、それは誰にも邪魔されないその人のみの世界にひたり、その人のみの時を持つということだ。そして一書を読み終えたときの充足感、しばらくの間余情となりその人をつつむ。作者の思いもまた同じであろう。

菜の花の向かうのきみを呼ぶ夕べ

藤原 若菜

相聞の歌は短歌俳句の別なく、読む人のこころをひとときの浄化にいざなう。再度の短歌の引用で恐縮だが、近藤芳美

の次のような歌はいつまでも記憶に残る。へあらはなるうなじに流れ雪ふればささやき告ぐる妹の如しと。勿論俳句にも相聞の句はある。しかし俳句という詩型は、短歌の持つ七七音の流麗さに形の上では及び得ない。右の歌で言えば、「ささやき告ぐる妹の如しと」である。

作者の句に返る。この句で大事な点は「きみを呼ぶ」、中でも「呼ぶ」という言葉だ。これが短歌の七七に代る俳句の表現である。この「呼ぶ」の中に作者は「きみ」への万感の思いをこめる。作者の事情を知る者としては、更にこの「向かう」が倫敦であるということをつけ加えたい。

きりり引く寒紅濃ゆき華甲かな

西川 春子

若き日の夢道づれに青き踏む

宮川 英子

ともに宮城県気仙沼市の春燈作家。三月十一日の大震災の直撃を受けた地域に住む。燈下集の諸岡孝子さんほか、この地からは八名の方が出句されている。宮城県内の皆さんの選が終ったのが奇しくも十一日の午前中だった。

西川さんの句。華甲は還暦の称。「きりり引く」にこれからの人生に踏み出す気持がこめられていて潔い。宮川さんの句。今年八十九歳の作者。「若き日の夢」と道づれにしかも「青き踏む」という前向きな姿勢に共鳴する。

「日録」にも書いたが、今度の震災は日を追うごとに惨事の大きさが戦慄を深めて行った。被災地の皆さんの安否が気づかれる。唯々ご無事を祈るばかりです。